高度で独自性の強い技術はまさに「職人わざ」。急増する精密機器のニーズに応え、ニッチ市場を開拓。

Top's Interview
【トップインタビュー】

株式会社橋川製作所
代表取締役社長
橋川　栄二

【PROFILE】
- ●1958年　広島市生まれ
- ●1981年3月　神奈川大学工学部卒業
- ●1981年4月　（株）ソディック入社
- ●1987年　（株）橋川製作所入社
- ●1989年　専務取締役就任
- ●1998年　代表取締役就任
- ●趣味　気功、ウェイクボード
- ●好きな言葉　進化向上

会社DATA

［設立］	1970年1月
［資本金］	1000万円
［従業員数］	7名
［売上高］	3600万円（2003年12月見込み）
［所在地］	広島市南区青崎1-4-12
［事業内容］	精密機器（金型および精密治具・部品等）の放電加工・受託加工・受託研究・技術指導

◆御社の事業内容についてお聞かせください。

当社は、主に金型や精密治具・部品等の放電加工を行っています。放電加工とは金型などに放電を繰り返し、複雑で微細な形状部の加工を可能にする技術です。電圧や時間の微妙な変化で微調整できる、職人技が要求される高度な技術なのです。

私たちは独自の微細放電加工技術を確立し、携帯電話やカメラ、飛行機の部品など、幅広いニーズに対応。こうしたニーズの受け皿として、全国の様々な企業から厚い信頼を獲得しています。

放電加工は自然界の落雷破壊現象をヒントにしています。それをミクロな世界に環境を置き換えて、活性バイオ菌が雷のかわりに発破作業を行うというイメージです。加工自体は目に見えないくらいの小さなエネルギーなのですが、微弱な爆発を繰り返し、目に見えない穴を掘っていくような形で加工が進んでいくわけです。

放電加工というのは、一言で言うと「溶かす加工」なのですが、溶けると聞くと、金属がドロドロに溶けて無くなるイメージを抱かれるかもしれません。しかし、溶けて無くなるほどのエネルギーでは、必要な部分まで除去されてしまいます。ですから実際には溶かすまでには至らず、雷を落としたらすぐに放電をやめてしまうのです。その時間が100万分の1秒から1000万分の1秒という、想像を絶するような世界。それは余りにも短すぎて、センサーでも測定できない領域なのです。現時点では放電加工現象そのものを定量的に数値化・データベース化するまでには至っていません。そのため放電加工は、私たち技術者の感性や創造性に委ねられているのです。

◆御社の現状についてお聞かせください。

現在、放電加工のニーズは決して多いとは言えません。ビジネス的に言えば、市場規模まだまだ小さい。しかし「どうしても橋川製作所の技術でなければできない」という要望は多く、金型分野においては従来の技術で99%まではできるけど、残りの1%を当社に持ってくるという生産・受注形態が多いのです。たとえばスペースシャトルの部品などは、宇宙で機能しなければならないので、ひとつ一つのパーツが非常に堅くて、削りにくい材質が使われています。そのため「ここだけは橋川さんのところでお願いします」と、このような形で様々な分野から発注があるわけです。この放電加工に関しては、世界でトップクラスの技術だと自負していますし、近い将来、私たちの技術が本当に必要とされ、ビジネスとして開花するだろうと考えています。

◆今後の事業展開についてお聞かせください。

中国という巨大な市場に、モノづくりの拠点がどんどん移動しているなかで、もう国内間競争をやっている時代ではないのです。これからは、中国でできることは中国に任せて、我が国にしかできないモノづくりに移行していかなければなりません。そのように変化していける企業が次の時代を担っていけるのです。積極的なチャレンジ精神が可能性のある新しい技術の芽生えにつながっていくのだと思います。

当社でも、「私たちにしかできない分野への取り組み」という明確な目標を設定しており、現在は新しい技術開発に着手できる環境にあります。過去には地域コンソーシアムという国の研究開発委託事業を4件受託してきました。2003年度にはナショナルプロジェクトに参画し、新たな研究開発に挑んでいます。これは東京大学をはじめとして、中央の機関と連携をとり、よりハイレベルな「究極のモノづくりを担って欲しい」という経済産業省からの要望なのです。このような事業に参画できるのは、当社にとってもメリットが多くとてもありがたいことなのです。しかし、次々と研究開発事業を受託しているために、1つの研究成果をビジネスとして成功させるに至っていないのが当社の現状です。今後は、この部分も改善していきたいと考えています。

◆御社の求める人物像についてお聞かせください。

当社は、繰り返しの生産性というのがまったくない業態ですから、技術を習得するには長い期間を要します。1年間は模索の日々が続きますし、来る仕事は毎日が日替わりメニューです。しかしその段階を乗り越えて2～3年経ったころには、幅広い経験と知識が仕事を通して自然と身についているのです。ですから、何よりも地道な努力と辛抱強さが求められますね。